

ふう 楓のいる風景



(株) エフ設計コンサルタント
花岡 史恵
HANAOKA FUMIE
建設部門

1. 出会い

私と楓との出会いは、今から約5年前。まだ母が生きていた頃だった。

母の体調不良に合わせたかのように、ドイツに留学していた娘が帰国し、仕事に明け暮れていた私に代わって、娘が母の面倒を看てくれた。

母と夫と娘と私の大人4人の生活は、思いのほか静かで、変化がなく、ドイツで気ままに暮らしてきた娘にとっては息苦しい日々になっていたと思う。

娘がある日、「ワンちゃんほしくない？」と言い出した。これは、私も考えていたことで、「ワンコなら絶対にフレンチブルドッグやな」と言った私に、「え～そうなん？」と、娘はあまり気乗りのしない返事だった。

しかし、私の決意は変わらず、ある日、フラッと立ち寄ったペットショップで、運命の出会いを果たすことになる。

ガラス張りの区切られたショーウィンドーの一角に、大きな耳をして、クリクリした目に、迫力ある鼻周りのフレンチブルドッグが1匹。

思わず、お店の人に、「この仔を見せてください。」と言って、ショーウィンドーから出してもらった。抱っこして、名前を聞いてみた。「ふう～」と、彼が返してきた。即決で連れて帰ってきた。

家に帰って、娘に見せたら、大喜びして、「フレブルって、案外可愛いなあ」と言い、器量良しの好きな母がどんな反応を示すか、ちょっと不安だったが、母にも気に入られた。

名前は、もちろん「ふう」。自分で名乗ったのだから仕方ない。それに、生後2ヶ月のこの仔の手足は小さい楓の葉っぱのようで、夫が「楓」の字を当てた。

こうして4人と1匹の生活が始まった。

昼間は母と娘に可愛がってもらい、夜は夫と私が世話をするといい、まるで子どもが一人産まれたような賑やかさに包まれた。



楓が、我が家の家族になって3ヶ月後に、母は80年の生涯に幕を引いた。

母が亡くなった日、楓は、空気を察したかのように、一日静かにケージの中で過ごし、一緒に悲しんでいるようだった。

フレンチブルドッグは、昔、フランスの家ネズミを取る犬として改良された品種で、犬というより猫に近い感性を持っている。(と、私は思っている。) 結構、気ままで、甘えて膝に乗る仕草は猫に近い。また、夏は暑がり、冬は寒がりの贅沢な犬である。それに、表情が豊かで時々人と見紛うことがある。

フレンチブルドッグ愛好家は、「フレブルを飼ったら他の犬は飼えない」と、みんな口を揃えて言う。犬なのに、猫のようで、人のようでもある仕草に魅了されてしまうのである。

一昨年、娘は結婚し、今は母の残した私の実家で、彼女の夫と昨年産まれた子供と、愛犬とで暮らしている。娘の愛犬も、やはりフレンチブルドッグである。

5年前は、漠然と犬がほしいと言っていた娘が、今では、「やっぱりフレブルが一番可愛い」と目を細める。

しかし、それは、5年前に、家族全員が、楓を家族として迎え、この小さな命の存在を母が優しく受け入れてくれたからだと思う。

そして、楓のいる風景を通して、母の存在を思い出させてくれるからだと思う。

いつもならケージ出たがる愛犬の空気察した母逝きし朝

2. 犬権

楓は、背中で怒っていた。

「ただいま」と言った私の声は、確かに彼の耳に届いているはずなのに、いつものように顔を擦り寄せては来ない。



楓の背中では、「おいらにもおいらの意地があるでガス」と、言っているかのように、頑なに固まったまま、私の方に振り返ろうとはしなかった。

無理もない。私は、今まで、楓を残して3日以上、家を空けたことはなかった。それが今回、姪家族の住むアメリカ訪問で11日間も家を空けていた。

夫の話では、毎日お利口に留守番をしていたが、夜になると寂しそうに私のベッドに潜り込んでいたらしい。

「楓くん、お利口さんにお留守番ありがとう」と、私は、楓を背中から抱きしめた。

怒っていたはずの背中がゆるゆると落ち始め、手足の力が抜けてとうとう彼の身体はフニャフニャになってしまった。

それから後は、私の腕の中で、複雑な思いを表すかのように、頭を振ったりお尻を振ったり、ブヒブヒと何かを話したりして、最後は、ハナハナ（鼻を鼻にくっつける愛情表現）を何度も繰り返した。

11日間、それは犬にとって、人間の2ヶ月に近い時間が経ったことになる。その間、きっと彼は、私のことを何度も考えながら毎日、私を待っていてくれたのだと思う。

犬と言えど、家族になると、もう他の犬と同じように、犬としては見られなくなる。「楓くんは、楓くん、おかあさんは、おかあさんっていう生き物なんだよ」って、言いながら、今まで、彼の人権（犬権）を尊重して生活してきた。

彼の今回の態度は、まさしく、人権（犬権）を持った凛々しい態度で、自分の気持ちを私にストレートに伝えてきた。

翌日、11日間も完全な休みを取っていたことから、急ぎの仕事で、また家を空けることになった。楓をリビングに残し、

「ちょっと、お仕事で出掛けるから、お留守番お願いね」と、私は恐る恐る言った。

昨日の今日で、楓がどんな態度を示すかが不安だったからである。しかし、彼は、いつもと変わらず、ちょっと寂しそうな顔をしたものの、定位置で寝ころんで見送ってくれた。親バカと言われそうだが、本当に聞き分けのできる賢い犬である。

夕方、家に帰って、楓に、アメリカ土産の水飲みボトルを見せてあげた。彼は、外に出掛けた時、人間がするように、ペットボトルに直接、口を付けて水を飲むのが好きなので、この水飲みボトルに興味津々といった顔で近づいた。

「今度、お出掛けした時に使おうね」と、言うと、嬉しそうにお尻を擦り寄せてきた。

自分のために買ってきてくれたものであることをちゃんと理解しているのである。

そして、11日間、楓が私を待っていてくれたように、私もまた、楓のことを忘れずに過ごしていたことを、彼は理解していたのである。

楓くんは背中で抗議寂しさをグッとこらえて過ごした十日

3. お兄ちゃん

昨年10月、娘の子どもが誕生した。私はおばあちゃんに、そして楓は叔父さんになったことになる？

しかし、私はまだ、孫におばあちゃんとは呼ばせたくない。そこで、

「楓くんは、秀くん（秀侑：孫の名前）のお兄ちゃん、私は楓くんのママだから、楓ママ

ちゃんと呼んでね。」と、娘に伝えた。(そこに夫も便乗して、夫は「楓パパちゃん」になった。)

娘と孫が、家にいる間、楓はしばらく遠目で見ながら孫と家族の対応を観察していた。「楓くんは、お兄ちゃんだから、秀くんを守ってあげるんだよ。」と言い聞かせると、孫のお守りをするように、いつも孫の足許にちょこんと座っていた。

孫が眠ると、孫の足許で一緒に眠り、孫が泣き始めると、急いで顔を覗き込んで、そわそわとこちらへ視線を寄せて助けを求めてくる。

孫の仕草はもちろん可愛いものだが、その横で一緒に見守っている楓の様子や仕草は、新しい家族を精一杯もてなそうとする愛情深い兄弟のようで、心和まされるものだった。

数ヶ月経って、娘と孫は自分の家に帰り、いつもと変わらない生活に戻った。

孫は、月に数回、遊びに来ているが、来るたびに成長している孫に、楓は、戸惑いながらもお兄ちゃんとして接しようとしている姿が、またいじらしいものである。

今まで、夏になると、庭にビニールプールを置いて、楓は水浴びをしていたが、今年は、孫と一緒に水浴びになった。

夏の間、何回か水浴びをしているうちに、

「おいらは、お兄ちゃんだから、プールはそろそろ卒業するでガスよ。」とでも言っているかのように、プールには入らず、外から孫を見守るようになった。

そして、水浴びで疲れた孫が眠ると、その足許で眠り、孫が起きると自分も起きて家族の側に座るといってお兄ちゃん業に徹して、孫に寄り添っていた。

孫は、今年10月に1歳を迎え、その行動範囲も広がってきて、こちらの対応もだんだんと忙しくなってきた。それは楓も同じと見えて、孫に追いかけられると逃げるようになった。少しずつ距離を置いて様子見をしては、自分のテリトリーを確保している。



しゅう 秀くんの眠る布団に ふう 楓くんもそっと寄り添い寝息を立てる



最近、孫が帰っていくと、ドッと疲れが出るのか、ブヒブヒ寝言を言いながらよく眠っている。

きっと、「お兄ちゃんとは、疲れるもんでガスな・・・」とでも言いながら眠っているのだろう。

これを書いている今も、楓は、私の足許で気持ちよさそうな鼻をかいて、時折、野山を駆けるような仕草をしながら、昼寝を楽しんでいる。